



今月のことば

monthly word

My 知財ものさし

日本弁理士会 副会長

辻田 幸史

平成 30 年度の副会長を務めさせていただきま
す辻田幸史です。パテント誌 8 月号の「今月の
ことば」の執筆を仰せつかりました。貴重な機会を
いただきましたので、かねてより思うところがあ
りました“知財ものさし”について、私の知財ラ
イフを振り返りながら書かせていただきます。

私の知財との出会いは、今から 30 年前の平成
元年の春です。とある大阪の大学の修士課程を修
了した私は、大学での研究内容と同種の研究がで
きるからという教室の先生の勧めで、かつて大阪
にありました製薬会社に入社しました。ところが
配属先は当時研究所の組織であった研究管理部特
許室というところでした。学生時代に特許につい
て知る機会がなかった私には、特許なるものは得
体のしれないものであり、唯一、耳にしたことが
あるのは“とうきょうとつきよきよかきょく”の
早口言葉くらいでした。もちろん弁理士という仕
事を知る由もありません。修士課程まで修了した
にもかかわらず就職先で研究をさせてもらえず、
どんな仕事をしているのか見当もつかない部署に
配属されて、ショックというよりも唖然とした記
憶があります。自分が配属されるとは露とも知ら
ない時点でその研究所の紹介時、研究所長が特許室
について強化をしたい組織と説明され、「ここに
配属される人はたいへんだ」と他人事として思っ
たことを覚えています。はじめて弁理士という言葉
を聞いたのは研究管理部長が「弁理士の資格を
持っている特許室長のように頑張ってもらいたい」と
激励された際だと思えます。「そういう資格があ
るんだ」とは思ったでしょうけれども、大学の教
室の先生の話とは違う部署に配属された私には
まったく興味がないことであり、特許室長からは
「3 年間やってみて自分に向いていないと思えば
辞めればよい」と言われたことが今でも耳に残っ
ています。

こうした知財との出会いから 30 年たった今、
私はどっぷりと(?)知財に浸らせていただい
ています。入社から 3 年の間に自分に向いていると
思ったからということではなく、単に会社を辞め
る勇気がなかったからですが、いずれにせよま
たく何もないところからの知財に対する私の尺度
(ものさし)を、実に実に多くの方々から形作っ
ていってくださり、現在に至っています。ここでい
うところの“ものさし”は、知財に対する向き合
い方のようなものと申し上げればよいでしょう
か、例えば何かを判断しなければならない時や決
めなければならない時に拠り所にするマインドの
ようなものとお受け取りいただければと思います。

思い起こしますと、知財について何も知らない
私をこの世界に導いて(引き込んで?)くださ
った方々として、特許室長をはじめとする特許室の
同僚、代理人をお願いしていました特許事務所の
先生方、同業他社の方々などが目に浮かびます。
入社してそれほど年月が経っていない時のこと
だったと思います。特許出願の準備作業で、高速
液体クロマトグラフィーで目的物を単離精製でき
たことをチャートで証明したかったのですが、ほ
んの少しショルダーピークが存在していました。
私は修正液を使ってそのピークの周辺を修正して
特許事務所に提出したところ、愚行を見透かされ
てこっぴどく叱られたことを今でも強烈に覚えて
います。いい加減な気持ちで取り組んではいけ
ないということを教わり、気の引き締まる思いを
したことは私の知財ライフの貴重な経験であり、
知財ものさしの根幹を形成しているような気がし
ます。

入社当時は知財に対して興味のかけらもなかつ
た私ですが、あることをきっかけにして企業弁理
士として会社の役に立たなければいけないとの思
いで平成 4 年の春に受験を志し、3 年後に合格で

きました。受験時代もまた、私の知財ものさしが形作られていく上で貴重な時間であり、大きな影響を与えたように思います。一緒に勉強して合格した友人とは20年以上たった今でも良き友人です。なかなか会うことができませんが、会えた際には多くのことを語り合い、こうした機会もまた、今の私の知財ものさしを成長させてくれています。合格した私に、国内外の知財の世界で活躍されている方々との出会いの機会を会社が提供してくれました。そこで見たこと聞いたこと感じたことの一つ一つが、私の知財ものさしの基礎になっていると思います。

私が就職した会社は、平成10年の春に同規模の製薬会社との合併により消滅しました。知的財産部も合体することになり、私たちは相手方の本社ビルに引っ越して業務を行うことになりましたが、これも私にとって貴重な経験でした。いながらにして他社の知財文化を学べたからです。こんなにも違うものかと驚きました。ただ、合併された側の私には従わせられた相手方のやり方になじめない部分が多く（今となってはよく理解できるのですが）、役に立たなければいけないと誓った会社がもう存在しないという虚しさはいかんともしがたいことがあり、合併から8か月後に退職しました。短い時間でしたがこの期間と一緒に仕事をさせていただいた方々も私にとって貴重な方々だと思います。

かくして私は、大阪での企業弁理士生活に終止符を打ち、東京での事務所弁理士生活を始めました。仕事を願う側から受ける側に移り、今度は多くのクライアント様、ひいてはその担当者様や発明者様から、また、弁理士の諸先輩方をはじめとする業界の方々から、たくさんの学びを受けました。そうした方々の中には気の合う方もいらっしゃるかもしれません（ましたし）うまくお付き合いできない方もいらっしゃるかもしれません。腹が立ったことや嫌な思いをしたこともあります。しかしながら、全ての方々が、今の私の知財ものさしが形作

られる上でなくてはならない大切な方々のように感じます。

弁理士会の会務活動は、上京して数年後から研修所の運営委員を中心に行ってきました。知らない方ばかりの中でのスタートでしたが、いつしか知り合いも増え、様々な機会が私の知財ものさしをよりよいものに成長させてくれたと思います。そして、今年度は副会長という大役を務めさせていただくことになりました。30年前の知財も弁理士も何も知らない興味もないところからの始まりを考えますと、ただただ驚きでしかありません。役員会が始まってまだ数ヶ月ですが、役員会の皆さんをはじめとする多くの方々との新たな出会いもあり、日々、貴重な経験をさせていただいています。さて、この1年間で私の知財ものさしはどう変化するのでしょうか。

知財ものさしは、知財に携わっておられる全ての方がお持ちです。どれ一つとして同じものではなく、もって生まれたものではありませんので、どんな大先生であっても何もないところから形作られてこられたはずで、それぞれの知財ものさしを他人がとやかく言うことはできませんが、知財ものさしは、より多くの方々、それは知財に携わっていない家族や学生時代の友人なども含めて、出会うことで、偏りを持つことなくneutralizeされ、よりよいものになると私は信じています。ですので、私は、こんな私の知財ものさしをこうして成長させていただいた、これまでに出会った全ての方々に感謝し、これからも様々な出会いを通して知財ものさしを成長させていきたいと思っています。知財ものさしに完成形はないと思います。知財の世界をリタイアするまで持ち続けるものであり、変貌を遂げていくもの、大切にしなければならぬものだと思います。思うところをうまく書けずもどかしいのですが、この拙稿をお読みいただいて何かを感じていただける方が一人でもいらっしゃればと願いつつ、文末とさせていただきます。